

社会の再生産と変形

- ロイ・バスカーの社会活動の変形モデルについて -

The Reproduction and Transformation of Society

-On Roy Bhaskar's transformational model of social activity-

田邊 浩

TANABE, Hiroshi

目次

1. はじめに
2. 先験的实在論と批判的自然主義
3. 社会活動の変形モデル
4. 社会学・心理学・社会心理学
5. 結びにかえて

1. はじめに

1960年代後半から70年代にかけて、「社会学の危機」なるものが叫ばれていた。しかし、アンソニー・ギデンスによれば、この社会学の危機はまさしく「正統派の合意」の崩壊にすぎないという(Giddens,1979,257-61頁)。ギデンスが正統派と呼ぶのは、方法論の水準における実証主義、理論の水準における機能主義、そして実体分析としての産業社会論のことである。かれは、この正統派の合意による社会学の支配という状況をいささか誇張したかたちで示したわけであるが、同様の認識はピエール・ブルデューにも見出すことができる。ブルデューはタルコット・パーソンズ、ロバート・マートン、ポール・ラザースフェルドという三者に代表されるものによって「偽りのパラダイム」、「統一された社会科学という幻想」が作り上げられていたのであり、社会学の危機とは結局その崩壊にすぎないし、そのことは科学の進展にとってむしろ有利な状況をもたらすものであると主張している(Bourdieu,1987,63頁)。

この社会学の危機を契機として、新たな社会理論構築への模索がはじまった。ジェフリー・アレクサンダーは、80年代に台頭してきたこのような動きを「新しい理論運動」と呼んでいる(Alexander,1982)。この新しい理論運動のなかで、さまざまな理論的アプローチが提出されているが、それらは一様に脱実証主義、脱機能主義(パーソンズ流の機能主義を乗り越えるという意味において)を標榜し、それによって近・現代社会の新たな理解をもたらすことを意図したものである。

ところで、この理論運動のなかにあって、「構造化」をキー・ワードとした理論的アプローチ

があらわれ、現在一つの立場を形成しつつあるように思われる。すなわち、トンプソンの言葉をかりていえば、「いかに構造が行為を決定するのか、あるいは諸行為の結びつきがいかに構造を決するかではなく、むしろ日常的文脈において行為がいかに構造化され、行為の構造的特徴が行為の遂行によっていかに再生産されるのか」(Thompson,1984,pp.148-9)に注目するものである。このような議論を展開しているもっとも代表的な人としてイギリスの社会学者、アンソニー・ギデンズの名をあげることができる。しかしながら、それはなにもギデンズにのみ限られるわけではない。ニーゲル・シュリフトは、そのようなアプローチを試みている一連の人々を「構造化論者」(structurationist)と呼び、ギデンズをはじめとして、ピエール・ブルデュー、ピーター・バーガーとトーマス・ルックマン、アラン・ドゥーイ、アラン・トゥレーヌ、ロイ・バスカーらをそれに属する人として挙げている(Thrift,1983)。ここであげられた人々すべてを果たして一括りにすることができるのか多少の疑問がないわけではない。しかしながら、われわれとしては少なくともギデンズ、ブルデュー、バスカーにはある共通点を見いだすことができると考える⁽¹⁾。そして、かれらの各々の理論を孤立したものとするのではなく、構造化論のなかに位置づけることによって、そのさらなる発展が可能となるし、またそうしていきたいと考えている。

シュリフトにならってこのような立場に共通する特徴を列挙するならば、それは以下の4点である(Thrift,1983)。

第1に、構造化論者は、社会生活の分析における構造決定論的アプローチも主意主義的アプローチも拒否し、それらに代えてその弁証法的総合を試みること。

第2に、構造化論は、構造と主体的行為を媒介する概念、たとえばブルデューの場合だったら「ハビトゥス」、ギデンズであるならば構造の二重性に基づいた状況づけられた実践としての「制度」や「システム」といった概念を巧みに考案すること。

第3に、人間行為の研究の必須の構成要素が、行為する過程において巧みに適用されるけれども、言説的には定式化することのできない暗黙的な知識の実践的意識を分析することからなっていること。

最後に、あらゆる社会的相互行為において、時間と空間が中心的な構成要素とされること、である。

さて、わが国においても、ギデンズとブルデューに関しては、かれらの著作が数多く翻訳され、多大な関心を集めるようになってきた。しかし、まだ十分にその考えが検討されていない人もい。なかでも、ロイ・バスカーの仕事は検討するに値する重要な試みであると思われる。というのも、かれの理論は、まさしく精緻に展開された脱実証主義的な認識論的・科学方法論的な仕事に基づいているからである。そこで、本稿では、バスカーの社会活動の変形モデルを紹介・検討し、構造化論のさらなる発展の一助となしたい⁽²⁾。

2. 先験的实在論と批判的自然主義

ロイ・バスカー (Roy Bhaskar) は、イギリスのマルクス主義的哲学者であり、現在オックスフォード大学で教鞭をとっている。かれは主として認識論ないし科学哲学に関する仕事を継続している。かれは、「社会」の科学が可能であるならば、われわれが科学の対象とする「社会」というものは、いかなる特性を持つものであるのかという問いから、「社会」の考察を行っている。その問いへの返答として、かれの社会活動の変形モデル (the transformational model of social activity) が提出されている。このモデルは、かれの認識論ないし科学方法論である先験的实在論 (transcendental realism) ならびに批判的自然主義 (critical naturalism) という立場から導き出されている。これを抜きにして、社会活動の変形モデルを理解することは困難である。そこで、まず初めに、先験的实在論ならびに批判的自然主義について、ごく簡略に見ておくこととする。

先験的实在論とは、バスカーの用語であるが、バスカーが主張するような立場はかれのみによって展開された訳ではない。イギリスにおいて1970年代後半から1980年代初頭にかけて、ニュー・リアリズム (new realism) と呼ばれて、地理学、政治学、社会学、組織研究、マルクス主義、批判理論など、さまざまな分野において展開され、一定の影響を持つ立場となったものである (Keat and Urry, 1975, p. 229)。その代表的論者として、バスカーを含めて、ロム・ハーレ (Harre, 1979)、ラッセル・キートとジョン・アーリ (Keat and Urry, 1975)、テッド・ベントン (Benton, 1977) らがいる。もちろんこれらの論者には、ある程度の相違がみられるし、必ずしも一枚岩としてあるわけではないが、基本的な立場は一致しているといえよう。

このようなニュー・リアリズムが台頭した背景には、従来の社会科学の哲学において大きな位置を占めてきた経験的实在論および先験的観念論に対する執ような疑念が存在している。ポスト構造主義ないしポストモダン思想は、基礎づけ主義、すなわち知識が何らかのものに基礎づけられることによりその確実性を確保しているという思考をきわめてラディカルなかたちで告発した (Giddens, 1990)。しかし、それらの登場をまたずとも、すでに科学的認識の合理性への疑いは生じていた。それをもっとも顕著な形で示したのは、いうまでもなくエドムント・フッサールである。いわば、こういった科学の危機あるいは西欧理性の危機は20世紀をおおった問題である。ニュー・リアリズムは何にもましてこの問題に対する (大方は、マルクス主義的な立場からする) 反応である。

では、経験的实在論ではなく、また先験的観念論にも依ることができないとするならば、科学的認識の合理性はいかにして確保されるのか。バスカーのいう先験的实在論の立場に立つと、知識の対象は、ヒュームに代表される古典的経験主義がそうみなしているような出来事それ自体ではない。しかしまた、カントに象徴される先験的観念論におけるような人為的に構成されたものという見方も否定される。では、先験的实在論が想定する知識の対象とは何であるのか。それは、諸現象を生起させる構造ないしはメカニズムであるとされる (Bhaskar, 1979)。しかしながら、こ

の構造ないしメカニズムは、構造主義が主張するような人間により構成されたモデルではなく、実在するものである。ではなにゆえに、この立場は「先験的」とされるのか。それは、世界がわれわれにとって可能である知識の対象であるとするならば、それらはいかなる属性を持つのかを先験的に問うものだからである（Bhaskar,1979）。

このことは、マルクスの『フォイエルバッハ・テーゼ』における次の言葉を容易に想起させる。「いままでのすべての唯物論（フォイエルバッハのもふくめて）のおもな欠陥は、対象、現実、感性がただ客体または直観の形式のもとにのみとらえられて、感性的な人間的活動、実践としてとらえられず、主体的にとらえられないことである」（Marx,1845,234-5頁）。社会現象という社会科学の対象をすでに与えられた客体としてではなく、「感性的な人間活動あるいは実践」のたまたものとして取り扱わなければならないし、それがいかなるものであるのかが先験的に問われなければならないのである。たとえば、日本において、真木悠介がすでに同じマルクスの言葉に依拠しつつ、社会の存立構造論を提出している（真木,1977）。真木は、マルクスに、「对象的＝客観的に存立する社会的な諸形象・諸法則を、それら相互の函数的＝機能的な関連を表示する公式やそのシステムとして外的に認識することに満足するのではなく、われわれ自身の主体的実践とその相互関係が、なぜ、いかにして、これらの諸形象・諸法則を存立せしめるにいたるのか、これらの对象的＝客観的な諸事実を、いったんその生成の論理において、流動化して把握しなおそうとする意思」（真木,1977,14頁）を読みとっている。そして、「社会構造の「法則的」な認識に先立つ問い」（真木,1977,15頁）として社会の存立構造論の必要を説いている。このようにいうのは真木だけではない。ブルデューもまた、その「実践の理論」をマルクスのこの言葉とともに始めており、真木とほぼ同様な認識を示している（Bourdieu,1980,82-3頁）。

ギデنزは、先験的実在論にある種の共感を寄せつつも、それに対して一定の距離を取っているように見受けられるが、かれもまた次のようにいう。「社会学は、「客体のあらかじめ与えられた」世界にかかわるのではなく、主体の能動的な行いによって構成され、生産される世界を問題にする」（Giddens,1976,231）、と。ギデنزによれば、従来の社会理論においては所与の社会が客体としてあって、それをいかにして認識すべきかという認識論的関心が中心を占めてきた。しかし、社会が人々の日々の活動によって作り上げられているものであるならば、まず社会の存在論が、すなわち人間であること、人間がすること、そして人間の活動によって社会が再生産され、あるいは変形されることこそが概念的に把握されなければならないのである（Giddens,1984, p.XX）。

いずれにしても、先験的実在論が認められるならば、社会科学においては社会の存在論がまず構築されなければならないということである。

先験的実在論においては、現実の3つの領野が存在する。すなわち、第一に事象を生起させる構造ないしメカニズム、第二に事象それ自体、そして第三に事象を知覚する経験である。このよ

うな考え方は、明らかに経験的実在論や先験的観念論とは異なっている。先に言及したように、このような考え方は、ブルデューにより展開されたものときわめて類似している。すなわちブルデューの議論においても、現実の「3つの領野」が存在しているのである。たとえば、はバスカーとブルデューの手法の類似性について次のように指摘している。「バスカーのなかでは社会システムが現実の三つの領野をもつと理解されている - 第一にそれは、社会における深層構造や傾向と結びついており（ブルデューの手法はそれにたいして直接に言明する）、そして第二に研究者によってなされる「体験」と結びついており（ブルデューは反省的な情調で言明する）。さらに第三に、日常生活の経験にそっている」（Harker,1990,275頁）。バスカーとブルデューの類似性はさておき、先験的実在論は、現実の3つの領野が存在するという考え方により、知識の基礎づけの問題を解決している。またそれにより、はじめて科学の成長の合理性を主張することができるというのである（Bhaskar,1979）。

さて、このような先験的実在論の立場がとられたとき、自然主義に対していかなる態度が示されることになるのだろうか。バスカーは、批判的自然主義という立場を導き出しており、以下でそれについて確認しておくこととしよう。バスカーは、自然科学と社会科学が本質的に同じようなやり方で説明を行うことができるという意味における自然主義を狙上へのせ、検討を加えている。これは社会科学における哲学の根本的な問題であるが、バスカーによれば、この意味での自然主義をめぐる論争において、三つの立場が存在するという（Bhaskar,1979）。その三つの立場とは、実証主義、解釈学、そしてかれのいう批判的自然主義である。実証主義は、あらためていうまでもなくその統一科学の主張からまったくの自然主義である。それに対して、解釈学は社会科学と自然科学の方法論的相違を強調する意味において根本的に反自然主義の立場にたっているといえる。

そして、社会科学の方法論をめぐって、自然主義と反自然主義の対立を乗り越えるものとしてバスカーにより提出されたのが、批判的自然主義である。というのは、それは自然主義と反自然主義の各々の長所を生かし、短所を切り捨てたうえに成り立っているものだからである。いわば、自然主義と反自然主義を総合したものが批判的自然主義である。バスカーは、自然主義と反自然主義の長所と短所を以下のように指摘している（Bhaskar,1979,p.20）。

まず、実証主義は、因果的法則ないし一般性が存在することを強調し、そういった法則が行為主体の自生的な理解にとって不透明であるかも知れないことを主張する点においては正しい。しかしながら、因果的法則を経験的規則性に還元し、それらを同定することによって説明を試みたことは誤りであるとされる。

他方で、反自然主義たる解釈学的な伝統は、社会科学がすでに解釈された現実を取り扱い、その現実が社会的行為者によって概念形成されるということを指摘した点は正しい。要するに、社会科学は少なくとも部分的には「主体 - 客体（概念 - モノ）関係よりもむしろ主体 - 主体（概念

- 概念) 関係を主題とする」のである (Bhaskar,1979,p.21)。しかし、こういった関係の様相に社会科学を還元することは誤りであるし、そのことによって合理的に擁護しうる概念的批判や変革の可能性を位置づけそこなっているのである。

したがって、批判的自然主義とは、以下のようなものと考えられる。それは、社会現象を生起させるメカニズムの超事実性を認めつつ、そのメカニズムが信念や意味から独立した存在であることを主張するのである (Bhaskar,1979)。このような批判的自然主義によって、自然科学と社会科学の両者にあてはまる方法によって科学的説明が可能であり、けれども現象を生起させるメカニズムの存在論的差異によって自然科学と社会科学には違いがあるといいうるのである (Bhaskar, 1979)。

3 . 社会活動の変形モデル

さて、先験的实在論ならびに批判的自然主義の立場に立ったとき、先に示された問い、すなわち「われわれにとって可能な知識の対象とされるいかなる特性を社会が有しているのか」ということに対して、いかなる回答が与えられるというのか。バスカーはこの問いに答えるさいに、主意主義と物象化という存在論的誤り (ontological error)、個人主義と集団主義という構成的誤り (constitutive error)、そして方法論的個人主義と社会決定論という認識論的誤り (epistemological error) を指摘している。バスカーにより誤りだとされるこれらの対立しあった立場をいかに考えるかは、社会科学において、良かれ悪しかれ、常に根本的な問題であり続けている。とりわけ、八十年代の「新しい理論運動」において、アメリカにおいてはマイクロとマクロの関係、それと平行にヨーロッパでは構造と行為の関係をいかに考えるかという問題意識が再び先鋭化し、それはまた、方法論的個人主義と方法論的全体主義の再考をもともなっていた (Rizer and Gindoff,1994)。社会活動の変形モデルは、このような問題を解決するものとして提示されているのである。

まず初めに、方法論的個人主義と方法論的全体主義の問題を取り上げよう。この種の問題は、科学的にはほとんど意味をもたない (塩沢,1983,338頁)。なぜならば、それは形而上学的問題であるからである。それが形而上学的問題であるというのは、絶対的な解決などありえないからである。個人から出発しようと社会から出発しようと、社会現象をよりよく説明することができるのであるならば、それはどちらでもかまわないといえる。したがってギュルヴィッチは、科学としての社会学にとって、その問題はすでに終わったものであると断じた (Gurvitch,1970)。しかしながら、形而上学的問題だから科学としての社会学に無縁の問題だと切り捨てることはできない。むしろ、従来の支配的思考に対して反旗を翻すために、ときとしてそのような形而上学的問題に対する反省が必要とされる。そして、冒頭で論じた社会学の危機を考慮するならば、七十年代以後の社会学にとってはとりわけそれが必要であった。

方法論的個人主義とは、一般に、あらゆる社会現象が個人に還元することによって説明されなければならないとする立場であるといえよう。それに対して、社会決定論は、個人に還元不可能な社会的事実をこそ分析の中心テーマとすべきであるというものである。これは、社会がいかに構成されているかという問題に対する個人主義と集団主義の対立に結びついている。個人主義においては、社会は個人の集まりからなっていると考えられているのに対し、集団主義は、社会は個人の集計以上のものであり、個人に還元不可能な社会的事実が存在するとするものである。一般に、社会学においては社会決定論の方が優位ではあるが、しかしこの方法論的個人主義と社会決定論にはいまだ解決が与えられているとはいえない。

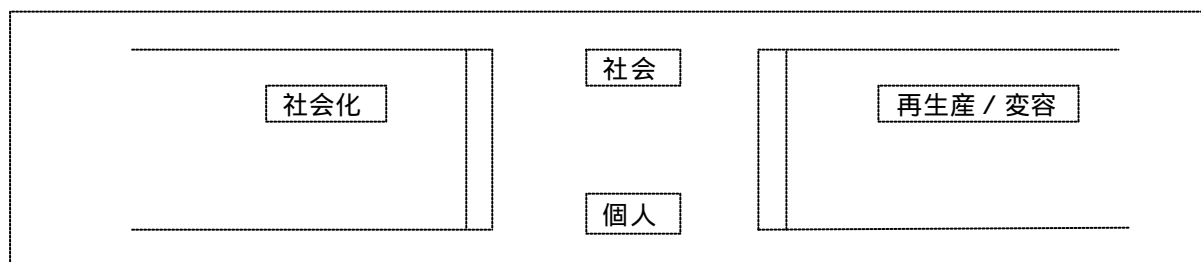
では、これら両者が否定されるとするならば、何が社会学の対象とされるのか。バスカーによれば、それは個人間ならびに集団間に存在する持続的な関係であり、そういった関係間の諸関係である（Bhaskar,1979,p.31）。このような関係論の源泉は明らかにマルクスに求められるという。周知のように、マルクスは抽象的な個人も社会それ自体という抽象物をも歴史の主体とする考えを観念論として退けた。そして、かれは社会諸関係、とりわけ生産諸関係こそ出発点に据えなければならないと主張した。つまり、「社会のもっぱらの主体は諸個人、しかし、かれらが生産し新たに再生産する相互諸関係のなかにおける諸個人」（Marx,1857-8,661-2頁）であるが、社会を個人に還元することはできない。なぜならば、「人間の本質はなにも個々の個人に内在する抽象体ではない。その現実においてはそれは社会的諸関係の総和である」（Marx,1845,237頁）からである。

次に、主意主義と物象化という存在論的誤りについてみることにしよう。これは通常、個人と社会あるいは行為と構造の問題といわれるものである。バスカーによれば、この問題に関して4つのモデルを提示することができるという（Bhaskar,pp.31-7）⁽³⁾。第一のモデルは主意主義的モデルであり、その代表として取り上げられるのはヴェーバーであるが、それは社会が、個人の意図的行為により構成されるとする立場である。これに対立しているのが物象化的モデルであり、デュルケームに象徴される。この立場においては、社会は個人に外在し、それを拘束するものと捉えられる。こういった個人と社会を対立させる思考を克服するべく、ピーター・バーガーによって、個人と社会の弁証法的相互作用を理論化したモデルが提出された。すなわち、バーガーのモデルは、社会が個人を作り出すとともに、その個人によって社会がつくられるというパースペクティブを打ち出している。これは、一見、個人と社会の問題を解決しているかのように思われる。実際、冒頭に取り上げたシュリフトは、バーガーを構造化論者に含めている。しかしながら、バスカーは自らの社会活動の変形モデルとバーガーらのモデルの同一視を敢然と拒否し、バーガーのモデルの誤りを次のように指摘している。それは、社会の理解に関しては主意主義的アプローチを助長し、個人の理解においては決定論的である。なぜか。バスカーによれば、バーガーによって社会が人間活動なしには存在しない、またそういった人間活動は、当の行為者による自己

理解なしには行われえないと主張されることは正しい。しかしながら、人間が社会をつくるという命題は正しくはないのである。この点は、特に強調されなければならない。というのも、構造化論、たとえばギデنزの構造化理論に対しても、往々にして、それが人間は社会によって創られつつ、社会を創るといった個人と社会の弁証法的相互作用を主張するものと誤解されるているからである。バスカーの社会活動の変形モデルが、人間が社会をつくるという命題を拒否するのは、社会はつねに人間に先在していると考えているからである。人間は無から社会を創造しているのではない。

さて、結局バスカーの社会活動の変形モデルとは図のように提示される。まず、個人と社会の関係は図1のように示される。社会は個人に影響を与える。これは社会化と呼ばれる。この社会化によって、諸個人は社会に関する知識を身につけ、時々状況に応じていかに振る舞うべきかを習得する。社会化された個人は、何らかの活動を行うが、その活動は社会を再生産するかあるいは社会をつくりかえるのである。こうして、社会は人間の活動によって支えられている。

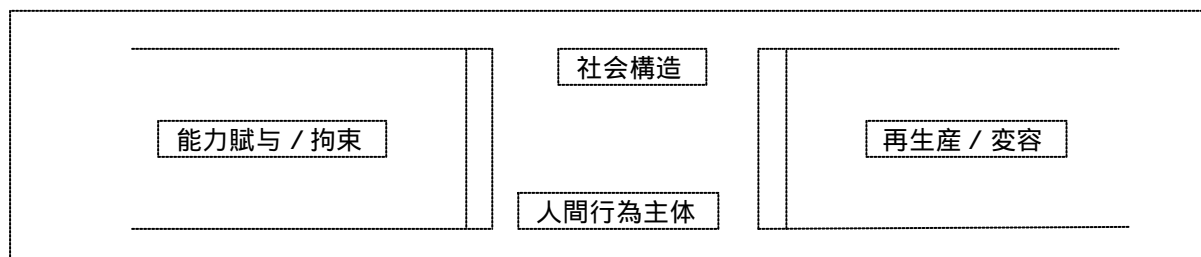
図1



出典：Bhaskar,1986,p.126.

次の図2は社会構造と人間の主体的行為との関係を示したものである。ここで社会構造は、ギデنزの議論を受けて、行為を拘束するものであるとともに、行為を可能にするものと捉えられている。社会構造の制約を受けながらもそれを利用しながら行為は行われ、その当の行為により、社会構造が再生産される、あるいはつくりかえられるのである。

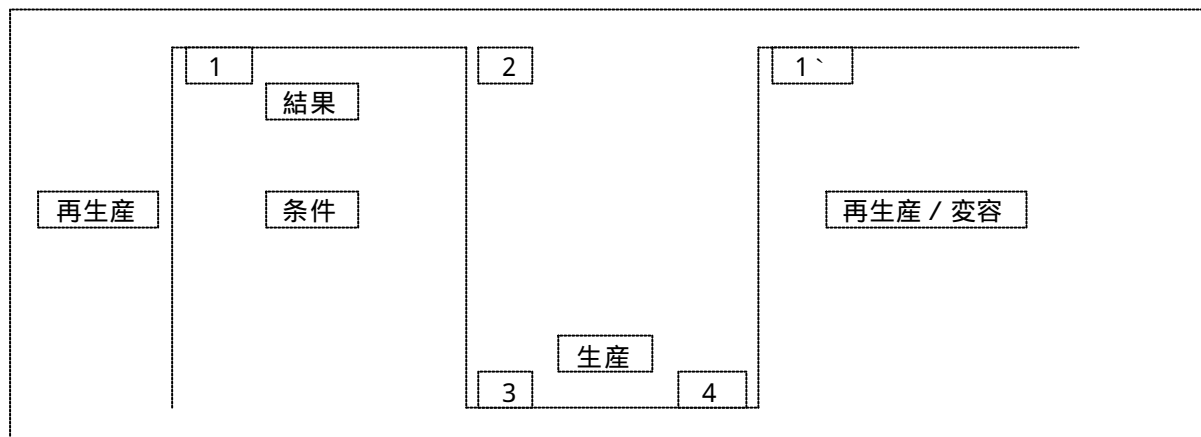
図2



出典：Bhaskar,1986,p.126.

ギデンス流に述べるならば、構造化の過程は図3のように提示される。それは以下のように解釈されよう。人間の絶えざる社会活動により社会構造が再生産される。それは人間の行為の意図せざる結果のたまものであり、そのような社会構造は人間行為の知られざる条件として作用する。人間はそのような条件のもとで、無意識的に動機づけられ、暗黙的な技巧を用いながら、意図的な活動を行い、その行為が無意図的に構造を維持するかあるいは変形するのである。

図3



- 1、1' = 意図せざる結果
- 2 = 知られざる条件 [実践の特性]
- 3 = 無意識的動機づけ
- 4 = 暗黙的技巧 [行為主体の特性]

出典：Bhaskar,1986,p.126.

ところで、バスカーにとって、社会構造とは社会現象を生起させるメカニズムのことである。これは自然現象を生起させるメカニズムとの対比において考えられている。しかし、自然現象を生起させるメカニズムと社会現象におけるそれとは明かな相違がみられるから、その相違が明確にされなければならない。すなわち自然主義の限界として、自然の構造とは異なった社会構造に固有な特徴が以下のように提示される（Bhaskar,1986,pp.130-2）。

第1に、社会構造の活動依存性である。これは、社会構造はそれらが支配し、可能とし、そして拘束する人間活動の契機においてのみ存在するということである。きわめて当然のことであるが、構造は自動的に存立するものではなく、人間の活動においてのみ継続的に存在することが可能となる。人間のいない社会というものは存在しない。

第2に、概念依存性があげられる。社会活動とは行為主体の信念によって形作られる限りにおいてのみ意図的であり、したがって社会活動そしてそれに依存する社会構造はその意味で概念依存性である。行為者は、何らかの意図ないし理由をともなって行為しており、その行為をつうじ

て世界を意味あるものとして構築している。しかし、混同してならないのは、社会構造は人間の意図したようにつくられているわけではないことである。むしろ、ほとんどの場合、人間の意図した活動により、意図せずして構造が形作られているのである。たとえば、われわれは日々の生活においてなんらかの商品を買うかもしれない。そのことによって、資本主義という制度を成り立たしめている。しかし、資本主義の制度を維持しようとしてそうしているわけではなく、あくまでもその商品が欲しいからそうしているにすぎない。

第3に、時間 - 空間依存性である。社会活動は、ある場所、ある時において行われる。社会構造はこのような社会活動に依存しているから、時間的空間的に不変的なものではない。社会活動にとって構造の再生産は必然的であるから、社会活動が継続的に行われる限りにおいて構造は時間と空間にわたって存在することができる。

そして第4に、社会関係依存性が指摘される。社会活動とは、行為主体がある位置をしめ、その位置に対して権利と義務として課される実践を行うことである。このような位置 - 実践のあいだの関係の集合が、いわば社会構造である。構造と実践の媒介システムが定まると、それは特定の位置と実践の結びつきに依存する他のあらゆる実践の条件である。つまり、その媒介システムによって特定の実践が産出される。したがって、社会構造の再生産と変形はそのような実践に依存しているから、社会構造はあらゆる他の社会構造にとって必然的であり、また社会形式の同一性にとっての条件である。この考え方は、行為と構造の関係にかんして部分と全体とは違うものであり、ギデンズのいう「契機と全体性」に近いと考えられる。

さて、以上は自然主義の存在論的限界として考えられている。しかし、自然主義の限界はこれのみに限られない。さらに3つの限界、すなわち認識論的、関係論的、批判的限界が指摘される（Bhaskar,1979）。

自然主義の認識論的限界は、社会科学が自然科学と違ってオープン・システムであるということに起因する。社会科学の対象たる社会は、歴史的な存在であって、不変の経験的規則性がえられるようなものではない。社会科学がオープン・システムであるということは、重要で決定的な検証状況が欠如しているということである。このことからする当然の帰結として、社会科学における理論の合理的な評価や発展の規準は、もっぱらそれがどの程度説明的であるかということであって、その予測可能性という規準には依存していないということになる。要するに、社会科学においては予測は不可能である。また、ヒューム的な法則の存在もきわめて疑わしい。

次に、自然主義の関係論的限界は、社会科学における研究対象と研究者のあるいは研究をおこなうということとの関係にかかわる問題である。自然科学とは違って、社会科学はその対象に自らを含まざるをえない。要するに、社会科学が生み出す知識はその対象たる社会と相互依存的である。したがって、社会科学がもたらす知識は、必然的に社会に介入していく。そうであるならば、社会は社会科学のもたらす知識によってつねに変化する可能性があり、社会科学はつねに未

完成であって、終わりがないのである。

最後に、自然主義の批判的限界とは、事実と価値、理論と実践の二分法が社会科学においては成り立たないということである。批判的自然主義は社会科学にかんしていかなる中立性も認めるものではない。中立な立場にある科学というようなものは存在しようがないのである。このことは認めざるをえない。要は、そのような認識にたつて「社会学の社会学」あるいは「社会科学の科学」を展開することである。このことは、社会学的知識が社会に介入することを考慮するならば、なおさら必要である。社会科学が生み出す言説がそもそも可能とされる社会的条件が問われる必要がある。とりわけ、社会学は自らの営為にたいしても反省的にかかわらなければならない。

4 . 社会学・心理学・社会心理学

バスカーは、社会を取り上げたのと同様に人間を取り上げる。すなわち「知識の対象たる人間はいかなる特性を持つのか」という問いが発せられる。バスカーは、社会学と心理学を峻別する (Bhaskar,1989)。かれがこの区別を強調するのは、人間行為を特徴づけるものはその意図性であるが、社会構造をそれに還元することはできないからである。人間行為の意図性などを取り扱うのが心理学である。それに対してかれのいう社会学とは、人間行為主体を括弧にいれ、再生産された結果としての構造を研究するものである。そして、再生産された結果を括弧にいれ、行為主体間や行為主体と自然との関係において、行為主体が資源を動員するさいにそのあり方を支配している規則を主題とするものが社会心理学である。要するに、バスカーによって社会学と社会心理学と名づけられているものは、ギデンズの用語に翻訳すれば、制度分析と戦略的行為分析に相当するものである。

バスカーが展開するいわば行為理論は、ギデンズの行為理論ときわめて類似している。実際、かれはギデンズの行為の階層 (the stratification of action) モデルを利用している。したがって、ここでは詳述を避け、バスカーの議論に特徴的な若干の点についてだけ取り上げよう。

先にも言及したように、バスカーは、人間行為主体を特徴づけるものはその意図性であると考えている。バスカーによれば、人間を動物と分け隔てるものは、人間のみがその活動のモニタリングをモニタリングすることができることである。かれはこのことを第二次モニタリング (second-order monitoring) と名づけている (Bhaskar,1989,p.79)。つまり、われわれは目的的に行動し、その目的を達成するように自らの行動をモニターし制御している。しかし、それだけであるならば多かれ少なかれ他の動物もしていることである。人間は、言語をもつがゆえに、自らに言及することができる。それゆえに、行為者が自らや他者の行為の結果について注意を払い、予測し、評価することが可能なのである。いわば、このような第二次モニタリングをとおして、はじめて自らのなした振る舞いを意味づけることができるといえよう。そしてそれにより、自らの行動を

そのまま継続したり、修正したりすることが可能になり、再帰的に活動の継続的過程に結びつくこととなる。要するに、人間を特徴づけるものはその反省能力である、これが適切に行為理論に組み込まれなければならない。

さて、さきに示したシュリフトによる構造化論の特徴づけにみられるように、構造化論には構造と行為を媒介とする概念が必要とされる。なぜならば、構造は人間活動をつうじてのみ継続的に再生産され、存在するものであるからである。従来の社会学においては、構造と行為を接続するものとして「役割」概念が用いられてきた。たとえば、パーソンズにおいて役割は「個人のパーソナリティと社会システムの構造との主要で直接的な連結部分」(Parsons,1967,p.11)であるとされている。しかし、構造化論においては、役割概念は拒否される。ギデنزやブルデューらが役割概念の使用を留保するのは、役割が所与のものであるかのような観念がつきまとっているからである(Giddens,1979,129頁;Bourdieu,1990,178頁)。そうであるならば、彼らが否定する行為と構造の二元論をひきずってしまうことになる。したがって、まったく別の考え方、概念が提出される。

このような構造と行為を媒介する概念として、たとえばブルデューのハビトゥスという概念があるが、バスカーの場合、位置 - 実践 (position-practice) システムという概念がそれにあたる。ちなみにギデنزもバスカーの議論を受けてその概念を用いている。

では、位置 - 実践システムとはいかなるものであるのか。社会的実践が演じられるところを場と呼ぶとすれば、ある場におかれた行為者は、必ず何らかの位置を占めている。ギデنزは社会的位置を「ある範囲の特権と義務をもたらす社会的アイデンティティ」(Giddens,1979,129頁)と定義している。社会的アイデンティティとは、職業、血縁、年齢といった社会的な基準からなるカテゴリーのことである(Giddens,1979,129頁)。要するに、社会的位置は社会関係によって定められる。学校という場においては、学生と先生という関係が存在しているし、企業においては上司と部下といった関係からなっている。そして、学校という場におかれれば、あるものは先生、あるものは生徒であるほかに、それぞれにふさわしく振る舞うことが要請される。また、人々が先生としてあるいは生徒として振る舞うことによって、現実に学校という場が成り立っている。

ハビトゥスとか位置 - 実践システムとは、このような社会的位置と実践とをまさしく媒介するものである。たとえば、ハビトゥスは「持続性をもち移調が可能な心的諸傾向のシステムであり、構造化する構造として、つまり実践と表象の産出・組織の原理として機能する素性をもった構造化された構造である」(Bourdieu,1980,83頁)とされる。それは、ある社会的位置を占めている行為者が「新しい未知の状況において行為する際の一般的なパラメーターを与えてくれる実践的で有効な原理である」といえる(Thompson,1982,212頁)。位置 - 実践システムもこのようなものとして理解することができる。そして、社会的位置とか実践が諸個人に割り当てられるならば、それは社会諸関係に関連づけてなされなければならない。つまり、社会諸関係は、位置と実践との

あいだの持続的な関係として概念化されるのである (Bhaskar,1979)。

このように、ハビトゥスないし位置 - 実践システムは、関係論的理解を押し進める。そして、そのような理解に基づくことにより、行為に対して構造的な条件がいかにか配分されるのかという問題、すなわち人々に対する資源の差別的な分配、ある位置への人々の差別的な配分といった問題にアプローチすることを可能にする。また、個人と社会の間の対立だけでなく、社会内部での利益をめぐる闘争の可能性や、持続性があり、差別的に配分された欲求や欲望に動機づけられた構造の変形の可能性を位置づけることが可能となる (Bhaskar,1979 ; Thompson,1984)。

5 結びにかえて

以上、バスカーの提示する社会活動の変形モデルについて検討を試みてきた。稿を閉じるにあたって、バスカーの仕事の意義に関して若干のコメントをつけ加えよう。

ブルデューは、「社会学は、人を自由の幻想から解放することによって、もっと正確にいうなら、幻想的自由に対する場違いの信仰から解放することによって、人を自由にするのです」 (Bourdieu,30頁) と述べている。この言葉はまさにバスカーのものでもあろう。かれにとって真の意味ある科学の実践は、人間解放を押し進めることができるものである。このような観点から、バスカーは科学を擁護しようと試みる。しかし、人間解放に結びついた科学とはいかなるものであるのか。バスカーは、科学の危機がとりざたされるなか、科学における合理性を主張することができるとしたら、それはいかなるものであるのかを徹底して追求していく。そのような考察から導き出されたのが、かれの先験的实在論および批判的自然主義であった。脱実証主義という掛け声ばかりで、その内実がなかなか見えてこないなかで、先験的实在論と批判的自然主義は一つの方向を指し示してくれるものであろう。

先験的实在論に基づくことは、社会の存在論を確立することを要請する。それはとりもなおさず、過程のカテゴリーに注目することであるといえよう。先験的实在論がマルクスの観念論から唯物論への転倒に示唆を受けたものであることはすでに見たところであるが、ルイ・アルチュセールは、ヘーゲルの観念弁証法から唯物弁証法への転倒における合理的核心は過程のカテゴリーにあると指摘した (Althusser,1970)。過程に注目することによって、社会を予断を持たずに具体的に把握することが可能となる。

また、過程のカテゴリーに依拠することによって、行為と構造、個人と社会、あるいは主観主義と客観主義といった社会科学に伝統的にみられる二元論に別の見方をもたらした。というのも、「過程」という概念は、「主体 / 客体の対立を中心とするカントを越える努力のなかから生まれた」 (塩沢,1983,353頁) からである。そうして提出されたのが、社会活動の変形モデルであった。

社会理論にかんしてバスカーが強調することは、そしてバスカーのみならずギデンズやブルデューにおいても同様であろうが、社会理論における実践の中心的な地位を確保することである。

社会は、人間の意図的活動がなければ、一時も存在することができない。しかし、社会あるいは社会構造はそうした行為の意図性に規定されているわけではない。マルクスは『資本論』において、「彼らはこのことを知らない。しかし、彼らはこれをなすのである」(Marx,1867,98頁)と述べている。人間は知らずして、あるいは意図せずして社会構造を作り上げているのである。この人間社会のあり様を、社会活動の変形モデルは大筋において説明している。

ここにおいて、人間の現実的可能性の最大の広がり位置づけることが可能となる。そして、それによって行為の合理的な自律性を増進させるのである。さきに引用したブルデューの言葉が、バスカーのものでもあるという意味がもはや明かであろう。

バスカーの社会活動の変形モデルは、以上検討してきたことから明らかなように、確かにギデンズやブルデューの理論と多くの共通点をもつものであるとみなすことができる。もちろん、バスカーは社会学者ではないから、そのモデルの内実に関して多くの議論をしているわけではない。また、たとえば自然主義に対する考え方にかんしてギデンズとバスカーには明かな違いがみられる。

本稿において、十分に検討することができず、他日を期すしかないが、バスカー、ブルデュー、ギデンズのおおのの理論を対照させ、その異同を明らかにすることによって、構造化論を一つの学派として成立させることが可能となろう。

【註】

(1) 少なくとも、ギデンズ、ブルデュー、およびバスカーに関して、かれらの理論が類似したものであることが、シュリフトのみならず、広範囲にわたって認められるようになっている。

(2) バスカーの仕事に関しては、すでに田口(1990)において、本稿よりも広範囲にわたって紹介がなされている。

(3) このような分類は整理の役割をもつのみでそれ以上のものではない。もちろん問題はそう簡単なものではなく、事態ははるかに複雑である。たとえば、デュルケームはかれに帰せられるステレオタイプに終始していたわけではない。つまり、デュルケームにも主意主義的な要素を見いだすことができる。ヴェーバーに関して同様のことがいえるだろう。

【文献】

Alexander, Jeffrey C. (1988) "The new theoretical movement", in Neil J. Smelser (ed.), *Handbook of Sociology*, pp.77-102, Sage.

Althusser, Louis (1970) "Sur le rapport de Marx a Hegel, Hegel et la Pensee moderne".(西川長夫・阪上孝訳『政治と歴史』紀伊国屋書店,1974年)

Benton, Ted (1977) *The Philosophical Foundations of the Three Sociologies*, Routledge.

- Bhaskar, Roy (1978) *A Realist Theory of Science*, Harvester.
- (1979) *The Possibility of Naturalism*, Harvester.
- (1983) "Beef, Structure and Place: Notes from a Critical Naturalist Perspective", *Journal for the Theory of Social Behaviour*, Vol.13, No.2, pp.81-95.
- (1986) *Scientific Realism and Human Emancipation*, Verso.
- (1989) *Reclaiming Reality*, Verso.
- (1991) *Philosophy and The Idea of Freedom*, Blackwell.
- Blaikie, Norman (1993) *Approaches to Social Enquiry*, Polity.
- Bourdieu, Pierre (1980) *Le sens pratique*, Les Editions de Minuit. (今村仁司ほか訳『実践感覚 1, 2』みすず書房 1998, 1990年)
- (1987) *Choses dites*, Les Editions de Minuit. (石崎晴己訳『構造と実践』新評論, 1988年)
- Bourdieu, Pierre & L.J.D. Wacquant (1992) *An Invitation to Reflexive Sociology*, Polity.
- Craib, Ian (1992) *Anthony Giddens*, Routledge.
- Frisby, David and Derek Sayer (1986) *Society*, Ellis Horwood and Tavistock. (大鐘武訳『社会とは何か』恒星社厚生閣, 1993年)
- Harker, Richard, Cheleen Mahar and Chris Wilkes (eds.) (1990) *An Introduction to the Work of Pierre Bourdieu: The Practice of Theory*, Macmillan. (滝本往人・柳和樹訳『ブルデュー入門 - 理論のプラチック -』昭和堂, 1993年)
- Harre, Rom (1979) *Social Being*, Blackwell.
- Giddens, Anthony, 1976, *New Rules of Sociological Method*, Hutchinson. (松尾精文・藤井達也・小幡正敏訳『社会学の新しい方法規準』而立書房、1987年)
- , 1979, *Central Problems of Social Theory*, Macmillan. (友枝敏雄・今田高俊・森重雄訳『社会理論の最前線』ハーベスト社、1989年)
- (1984) *The Constitution of Society*, Polity.
- (1989) *The Consequences of Modernity*, Polity.
- Giddens, Anthony and Derek Gregory, 1984, "Space, Time, and Politics in Social Theory: an interview with Anthony Giddens", *Environment and Planning D: Society and Space*, Vol.2, pp.123-32.
- Gurvitch, Georges, 1950, *La vocation actuelle de la sociologie*, P.U.F.. (寿里茂訳『社会学の現代的課題』青木書店, 1970年)
- Keat, Russell and John Urry, 1975, *Social Theory as Science*, Routledge.
- Layder, Derek, 1990, *The Realist Image in Social Science*, Macmillan.
- 真木悠介, 1977, 『現代社会の存立構造』筑摩書房.
- Marx, Karl (1845) *Marx-Engels Gesamtausgabe, Erste Abteilung, Band 5*. (古在由重訳『ドイツ・イデオロギー』岩波書店, 1956年)

- (1857-8) Grundrisse, Dietz Verlag. (高木幸二郎監訳『経済学批判要綱』・・・, 大月書店, 1958-65年)
- (1867) Das Capital, Bd.1. (向坂逸郎訳『資本論』第一巻, 岩波書店, 1967年)
- Outhwaite, William, 1991, "Agency and Structure", in Jon Clark, Celia Modgil and Sohan Modgil (eds.) Anthony Giddens -Consensus and Controversy-, pp63-72, The Falmer Press.
- Parsons, Talcot (1967) *Sociological Theory and Modern Society*, Free Press.
- Ritzer, George and Pamela Gindoff, 1994, "Agency-Structure, Micro-Macro, Individualism-Holism-Relationism", in Piotr Sztompka(ed.), *Agency and Structure*, pp.3-24, Gordon and Breach.
- 塩沢由典 (1983) 『近代経済学の反省』, 日本経済新聞社.
- Thompson, John B., 1981, *Critical Hermeneutics*, Cambridge University Press. (山本啓・小川英司訳『批判的解釈学』法政大学出版局, 1992年)
- (1984) *The Study of Ideology, Polity*.
- Thrift, Nigel J., 1983, "On the Determination of Social Action in Space and Time", *Environment and Planning D: Society and Space*, Vol.1, pp.23-57.
- 田口富久治, 1990, 「社会科学方法論の基本問題」, 法政論集135号, pp.439-68.